

日本神経科学学会 2019 年度の活動報告

日本神経科学学会（西真弓・奈良県立医科大学・nmayumi@naramed-u.ac.jp）

Activity Report in 2019, The Japan Neuroscience Society

The Japan Neuroscience Society

(Mayumi Nishi, Nara Medical University, nmayumi@naramed-u.ac.jp)

日本神経科学学会は、脳神経系に関する研究の推進を目的に1991年に設立された団体で、現在約6000名の会員で構成されています。2017年より旧男女共同参画委員会を発展的に解消し、ダイバーシティ対応委員会が発足しました。今年度の大会開催中の同委員会の活動について報告致します。

1. 子育て中の研究者の学会参加支援

本学会における過去6年間の年次大会参加者の男女比を調べたところ、女性の割合が23.93→24.82→26.58%→25.38%→26.67%→26.63%とわずかながら増加し、その後ほぼ横ばいの状態です。特に20代の女性参加者がこの6年間で1.45倍に増えており、参加が増えている20代～30代女性が年次大会に参加しやすい環境を整備することは、女性が今後も研究活動を継続するために重要であると考えられます。本学会では2004年以来、継続して大会中の託児室を設営しており、今年のはべ48名の利用がありました。子供と一緒に使える休憩室も設置しています。今後、ポスター会場の一角における親子スペースの設置等を含め、このような取り組みを次年度以降も継続する予定です。

2. 大会中のダイバーシティ対応委員会企画

日本神経科学学会・日本神経化学会ダイバーシティ対応委員会主催ランチョン企画「外国・日本に留学している研究者の日本におけるキャリアパス」

座長：杉山 清佳（新潟大学大学院医歯学総合研究科）

東田 千尋（富山大学和漢医薬学総合研究所）

新潟朱鷺メッセにおいて開催された年次大会3日目の7月27日（土）にランチョン討論会を企画しました。今年度は神経科学学会と神経化学会の合同大会であったため、この企画も両学会の合同企画としました。比較的大きな会場にて、150名分のお弁当を学会予算より提供いただき、和やかな雰囲気の中、まずオーガナイザーより企画の趣旨説明が行われました。その後、「海外に留学あるいは有職者として仕事をしている日本人研究者の帰国後のキャリアパス、また日本に留学している外国人留学生・研究者のキャリアパス」について、国籍、性別、ポジションが異なる4名のスピーカーにより、それぞれの視点からキャリア形成過程における具体的な成功談や問題点について話題提供していただきました。4人4様の大変興味深いキャリアを語っていただき、聴衆は話しに聴き入りました。この企画は英語で行われたため、外国人を含む、幅広い年齢層の男女、約150名の参加がありました。昨年同様男性研究者からも多くの質問、発言がありました。

ダイバーシティ対応委員会としての活動も3年目に入り、委員のメンバーについても多様性を高めていきたいと考えております。来年の神戸の大会においても同様なランチョン企画を行っていく予定です。